

令和5年度 自己評価表

中長期目標 (学校ビジョン)	人と関わりながら自立と社会参加に向けて努力する子どもの育成
-------------------	-------------------------------

<p>白兔のあいさつ</p> <p>あ いさつを交わし みんななかよく い のちはひとつ 自分も友達も大切に う んどうをして 健康で元気な身体 え がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校 お もいやりのある 豊かな心</p>
--

今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> 人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成 確かな学びにつながる学習指導の充実 児童生徒の健康と安全を守る教育の推進 知的障がい教育の専門性の向上・発揮
----------	--

年度当初								
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成	・地域との連携 ・交流及び共同学習	小学部	<ul style="list-style-type: none"> ○人との関わりやコミュニケーションの広がり、相手に思いを伝えること等を目標として、個々の実態に合わせて日々実践に取り組んでいる。 ○学校(保育園)間交流等、地域との交流活動について、児童の実態に合わせた内容や感染症対策に配慮した取り組み方について検討している。 ○学校周辺の地域にある施設や自然をテーマにした学習や体験活動を積極的に取り組みはじめています。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業づくりや指導、支援の方法、環境の設定等を工夫することで、児童同士の関わりが広がりや児童同士が支え合う姿が見られる。 ○児童の実態に合わせた内容やリモート等感染対策等に基づいて、実施の仕方を工夫しながら交流を図っている。 ○学習活動の中に地域に目を向けた教材や体験活動を取り入れて実践を重ねている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童の実態に合わせた人との関わり方やコミュニケーションの捉え方、指導、支援の仕方について、学部研修会を設定する(学期に1回)。 ○学校、保育園と連携を図り、交流の目的や児童の実態を整理し共有した上で、安全に活動できる交流の仕方について検討する。 ○地域の自然や施設、人材を積極的に活用し、地域を題材にした学習機会を1回以上設定する。 			
	・地域との連携 ・交流及び共同学習	中学部	<ul style="list-style-type: none"> ○学習場面において、生徒同士で声を掛け合ったり、お互いを意識して活動したり姿が見られるようになってきている。 ○リモートを活用して、地域や地域の方とつながることで、生徒の地域に対する関心も、調べ学習等を通して少しずつ深まってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験的な活動を通して、人と関わり、自分の思いを伝え、仲間と一緒に目標に向かって活動している。 ・これまで学習してきたことや経験を生かして、地域や地域の人の活動を深めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○グループや少人数で行うことや人と関わるのでできる場面の設定をするなどの学習環境の工夫を続けて行っていく。 ○状況を見ながら、可能な限り地域や地域の方との直接的な関わりが持てるような学習を計画し、地域に対する関心をさらに深めていく。 			
	・地域との連携 ・協働の推進	高等部	<ul style="list-style-type: none"> ○コロナ渦であるが、地域での販売活動や清掃活動を工夫して継続している。「白兔よろずや」については公民館での実施にとどまっており、活動の場を広げていくことが期待されている。 ○保護者からは進路に関する情報提供の要望があり、「進路の手引き(保護者用)」を作成して活用を始めたところである。コロナ渦で資料やDVD視聴などの方法による情報提供になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の方々とのコミュニケーションを取りながら活動している。よりよい活動になるよう工夫して取り組もうとしている。 ○地域社会での経験や進路に関する情報を基に、生徒、保護者が卒業後の生活をイメージしながら進路について考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒が計画・評価をしながら「白兔よろずや」を運営する学習場面を設定する。販売の場を拡大する。地域とつながる活動(清掃、販売等)を継続して実施する。 ○進路の手引き(保護者用)を活用する場面をつくりながら、進路に向けての情報提供を行う。対面で話ができる場を工夫して設定していく。 			
	・病院等との連携	訪問学級	<ul style="list-style-type: none"> ○病院生の学校生活において、感染症対策、行事計画、個別の教育支援計画作成等に関して、病院関係者との連携が取れている。 ○病院生、在宅訪問生の人との関わりを充実に向け、病院および家庭、本校との連携を図っていく必要がある。また、個々の学習のねらいをもとに必要なに応じてICT機器等を効果的に活用しながら、人との関わりを充実に向けた実践を進めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の体調や心身の状況等についての的確に把握し、実態に基づいた授業実践がなされている。 ○児童生徒が安心安全な環境のもと、学習を通して人への気付きや関心、関わりを広げている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○病院や家庭と連携を取り、その情報を日々の授業の打ち合わせ等で共有し授業実践を行う。 ○児童生徒の体調、および学習内容を情報共有しながら、年間行事等を見据え、個々の実態に応じた人となつながら授業を計画し実践する。 			
2 確かな学	・ICT機器の活用 ・学習指導要領に対応した授業研究	小学部	<ul style="list-style-type: none"> ○徹底した実態把握を基に、児童に合った目標設定と授業作り、次の段階を見据えた支援のあり方や評価の仕方について研究を進めている。また、生活単元学習等の合わせた指導について、新学習指導要領の教科の内容を意識して目標設定、授業作りを進めている。 ○教科の学習について、新学習指導要領を基に教材研究や実践を重ねている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童の実態、発達段階に応じた指導、支援を重ねている。生活単元学習等の合わせた指導について、教科の目標や内容を意識して計画し、個々の目標につながる授業が展開されている。 ○教科学習(国語、算数)、課題学習の内容、教材の充実が図られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○グループ研を通して、実態把握の仕方や教科の内容を意識した目標設定、評価の仕方等について学級の実態に合わせて研究を進める。 ○教科の学習(国語、算数)や課題学習について、学部会で授業づくりと教材の共有化を行う(月に1回程度)。 			

<p>びにつながる学習指導の充実</p>	<p>・ICT機器の活用 ・学習指導要領に対応した授業研究</p>	<p>中学部</p>	<p>○生徒自らICTを活用する姿が少しずつ見られつつある。教師も、ICT機器を活用して学習を展開することができるようになってきた。図書館を調べ学習等で活用することが増えてきた。 ○授業改善を図り、生徒が意欲的に学習に取り組めるような教材の準備や環境の設定の工夫ができるようになってきた。</p>	<p>○実態に応じて、生徒自らICTを活用して学習活動を行っている。 ○学年団やグループで、授業を振り返り、授業改善を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を目指している。</p>	<p>○教師のICT機器の活用に関する理解だけではなく、生徒がICT機器を活用してどう学習していくのかということに関しても研修及び共通理解を図っていく。 ○学年団やグループで授業の振り返りを行い、授業改善ができるように、時間の設定や研修の機会を持つ。</p>			
<p>2 確かな学びにつながる学習指導の充実</p>	<p>・ICT機器の活用 ・学習指導要領に対応した授業研究</p>	<p>高等部</p>	<p>○単一学級では、「情報」の授業において生徒自身がクラスルームを使って学習することができ始めている。教科学習での使用についてはまだ不十分である。高等部一人1台端末の整備に向けて、購入方法や管理の仕方、ルール作りなどを協議している段階である。 ○各単元における個別の目標と評価についての検討が不十分である。</p>	<p>○高等部1、2年生徒に一人1台のタブレット端末が整備されている。 ○学校での学習や個に応じたアプリケーションなどの活用が促進されている。 ○校内研究を通して、単元における個別の目標設定と評価の方法を理解している。</p>	<p>○タブレット端末購入に関する保護者説明会を4～7月までに2～3回程度実施する。端末購入がスムーズにできるよう、説明資料を作成する。 ○教科指導におけるタブレット活用の事例を紹介したり、活用した事例を記録して共有できるようにしたりする。 ○校内研究を通して、単元における個別の目標設定や評価の仕方について研修を深めつつ、実践する。</p>			
<p>3 児童生徒の健康と安全を守る</p>	<p>・つながりと活用に向けた作成文書の整理</p>	<p>教務部</p>	<p>○各書き物の課題等について整理し、今後の見通しと方向性について職員に伝えることができている。校内で話し合いを続けることで、各書き物のねらいや課題等がより明確になった。また、各書き物のねらいやつながりについて校内で再確認する機会を持つことができ、職員の目標設定や児童生徒理解への意識が高まっているが、活用面での課題がある。</p>	<p>○業務の効率化を図ることで、個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づく確かな学びにつながる学習指導の充実のための時間が確保できている。</p>	<p>・他の特別支援学校の様式等について情報収集をすることで、入力システムを見直し、効率的に業務が行えるようにする。 ・校務支援システムへの移行期間として、つながりのあるシステムの構築に向けて、作成文書の様式等の整理を行う。</p>			
<p>3 児童生徒の健康と安全を守る</p>	<p>・情報活用能力の育成</p>	<p>情報教育部</p>	<p>○クラスルームを活用したりリモート学習や式典等への参加等、リモートの活用が進んでいる。引き続き教員のICT活用スキルの向上、重度重複障がい児童生徒のICT活用、単一障がい学級の一斉指導におけるICT活用の情報収集と周知を行う必要がある。 ○司書教諭と学部図書館担当、学校司書が連携し、各学部での学習や読書活動における図書館の利活用が進んできており、学習を担当する89%の教員が図書館を利活用している。今後もより多くの先生に図書館を活用してもらうために、児童生徒の多様な実態に応じた効果的な資料や図書館の利活用事例についての情報発信を継続して行う必要がある。 ○令和5年度より高等部における1人1台端末の運用が始まり、本校での購入端末の検討や運用ルール等を含む学習環境の整備を早急に行う必要がある。</p>	<p>○教員はオンライン(GoogleMeet)を活用して、学習指導における活用場面や方法が拡充している。Google Workspaceを活用した学習が単一障がい学級を中心に行われている。児童生徒の実態に合ったアプリケーションや情報機器の活用が、重複障がい学級を中心に進んでいる。 ○図書館や図書館資料、司書教諭や学校司書を活用した教材研究や授業がなされている。(学習を担当する教員の9割以上が図書館を利活用している。) ○高等部では、各家庭で準備された端末を用いて生徒の実態に応じた学習が開始されている。</p>	<p>○ICTサポート事業を活用しながら、児童生徒への情報教育や教職員研修を進める。教員のICT活用スキルの向上と児童生徒の効果的なICT活用のために校内巡回・ICT活用相談を引き続き全学部で実施する。 ○図書館や図書館資料を活用した学習の提案やイベントの企画をする。(図書館オリエンテーション、おはなし会、図書館まつりなど) ○図書館の資料や利活用事例について情報を発信する。(図書館だより、ノーツ掲示板、図書館前掲示板など) ○図書館への要望を聞く機会を作る。(職員図書購入希望アンケート、図書館利用アンケートなど) ○管理職、事務部、高等部と連携しながら保護者説明資料の作成と説明会での周知を行い、円滑な端末運用となるよう調整を行う。 ○授業者が学習場面でのiPadの活用の見通しが持ちやすくなるよう、授業実践やアプリの情報提供を行う。</p>			
<p>3 児童生徒の健康と安全を守る</p>	<p>・学習指導要領に対応した授業研究</p>	<p>研究部</p>	<p>○事例を通し、子どもの日々の課題や対応、次のステップ等をグループで共通理解し取り組んだ。授業におけるめざす子どもの姿(評価規準)の設定や手立て、評価についての学校全体での共通理解ができている。</p>	<p>○授業における子どものめざす姿(評価規準)を明らかにし、それを生かした授業づくりや評価の仕方がわかるようになる。</p>	<p>○評価規準の設定、授業づくり、評価という一連の流れを、授業を通して考えたり話し合ったりできるようにグループ研を進めていく。</p>			
<p>3 児童生徒の健康と安全を守る</p>	<p>・健康教育の充実 ・防災・安全教育の推進</p>	<p>全学部</p>	<p>○児童生徒、教職員ともに感染症等の罹患防止、拡大防止に取り組んでいる。 ○健康保持や防災への意識、日常生活における安全へ意識について、避難訓練や日々の日常生活の指導等で繰り返し学習する機会をもっている。</p>	<p>○自分や周りの人が健康に過ごせるよう感染症対策を意識した上で、工夫しながら授業や活動に取り組んでいる。 ○各学部の実態に合わせて健康安全教育の取り組みの充実を図り、児童生徒自身が自らの健康や防災について意識した態度や行動が見られる。</p>	<p>○児童生徒が自分や周りの人の健康を守るため、換気、手洗い等の手指衛生、人との距離等の感染対策を意識して学習や活動に取り組めるよう指導、支援を行う。 ○児童生徒が自分の健康状態について自己理解を深められるような取り組みの工夫をする。日々の日常生活の指導や避難訓練等の機会に自らの安全を意識するための指導、支援を行う。</p>			

教育の推進	・防災・安全教育の推進	健康・安全部	<p>○保健、食育、安全、環境の各分野で研修や訓練等を実施し、教職員の共通理解する機会を設け、安心安全な学校作りに取り組んでいる。</p> <p>○避難訓練や交通安全教室を毎年実施することで、児童生徒及び教職員に対して「自分の命は自分で守る」学習や指導を継続して取り組んでいる。</p>	<p>○訓練や研修を通して、教職員の危機管理意識が向上し、安心安全な学校作りに取り組んでいる。</p> <p>○「自分の命は自分で守る」教育を通して、防災や感染症について自らの健康や防災について意識し、学ぼうとする児童生徒の姿が見られる。</p>	<p>○保健、食育、安全、環境の各分野から児童生徒への学習指導ができるように、教職員に対して掲示板等を通じて情報発信し、理解啓発を行うとともに、各種研修、訓練を通して教職員の危機管理意識の向上を図る。</p> <p>○昨年度のアンケートを基に、よりよい研修や訓練となるよう検討する。</p>			
4 知的障がい教育の専門性の向上・発揮	・チームで取り組む支援	小学部	<p>○学級担任だけが課題を抱え込まないよう、学年会等で児童の実態、状況について共通理解し、学部全体で共有して指導にあたる意識を持ちつつある。</p>	<p>○児童の実態、状況について学部全体で情報共有が行われ、学部全体で児童を見ていく意識、一貫した指導しようとする意識が高まっている。</p>	<p>○学年での話し合う機会(職朝時、月1回程度の学年会)の充実と報告、連絡、相談の流れを徹底することで児童の気になる状況の早期発見に努める。</p> <p>○支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当との連携を密に図る。</p>			
	・チームで取り組む支援	中学部	<p>○情報共有を行い、支援部や関係機関との連携を図り、チームで取り組むことができている。</p> <p>○生徒や保護者の思いに寄り添い、家庭との連携を図ることができつつあるが、卒後に関する進路についての情報提供が不十分な面もあった。</p>	<p>○校外の関係者と迅速に情報共有が行われ、指導・支援に生かされている。</p> <p>○生徒や保護者の夢や希望、思いや困り感に寄り添い、一緒に進路について考えている。</p>	<p>○引き続き、学年団・グループでの情報共有を大切にし、支援部及び関係機関との連携を密にし、学部全体で生徒のよりよい支援の方法について共通理解を図っていく。</p> <p>○卒後の進路について、教員も理解を深め、生徒や保護者に情報提供ができるよう研修等を行う。</p>			
4 知的障がい教育の専門性の向上・発揮	・チームで取り組む支援	高等部	<p>○学年の報告を受け、支援部を窓口外部機関とも連携しながら対応できているが、学部内での迅速な情報の集約や共有という点ではできていないこともある。口頭での報告は職朝や学部会で行っている。</p>	<p>○気になる事案に対して、学部関係者や支援部に情報が共有され、役割分担しながら指導・支援が素早く行われる。必要に応じて外部機関と連携している。</p>	<p>○気になるケースについては、支援部の学部コーディネーターや生徒指導担当に情報が集約されるようにし、必要に応じてケース会の開催や経過報告等ができるようにする。ケース検討の記録を残しておくようにする。</p>			
	児童生徒の実態に適したチームでの授業作り	訪問学級	<p>○児童生徒についての共通理解の会を通して、表出に対する見取りを共有し支援につなげている。よりの確かな児童生徒理解に向け、日々の情報交換、研修等を継続的にいき、授業に生かしていく必要がある。</p>	<p>○児童生徒の支援や目標設定等について、教師間で日々情報交換がなされ、授業作りに生かされている。</p>	<p>○月に1~2回程度、学部内の教務部、研究部を中心に、目標設定、授業作り、評価等の研修の機会を設定する。</p>			
	・チームで取り組む支援	研究部	<p>○コロナ禍で県外研修等が少なく、新しい情報に触れる機会が限られているが、Classroomの活用によって15分研修の参加者が増えている。研修内容を実際に生かしたかどうかは検証が必要。</p> <p>○事例を中心とした少人数でのグループ研だったので、共通理解をしながら進めることができた。グループ研の内容をグループ全体で取り組むという点では課題が残る。</p>	<p>○それぞれの教員が、学んだことを児童生徒の指導や支援、グループ研に生かしている。</p> <p>○グループ研で評価規準の設定や授業づくり、評価について活発に意見交換がなされ、共通理解のもと授業実践が行われている。</p>	<p>○校内研修や15分研修で、研究推進に関わる内容、授業づくりに役立つ内容、障がい特性に対応した授業づくり等を取り上げ提供する。</p> <p>○研修内容が実践に役立ったかどうかのアンケートを実施する。</p> <p>○授業に関わるもの同士でグループを組み、グループ全体で評価規準、授業づくり、評価について話し合い、授業に取り組めるようにする。また、各学部が共通して取り組めるように授業計画シート、評価シート等を提案する。</p>			
	校内支援の充実	支援部	<p>○生徒指導とキャリア教育と教育相談の3本柱の活動は軌道に乗ってきたが、気になる児童・生徒の情報共有、早期対応に向けて支援部内でもっと連携を深めていく必要がある。また、各活動について発信していく必要がある。</p>	<p>○児童生徒の情報を把握するための仕組みが充実し、各学部と連携しながら課題の早期解決や先を見通した支援が行われる。</p>	<p>○情報共有シートの記入を促し、有効活用する。</p> <p>○生徒指導、キャリア教育、教育相談の担当者会を持つなどし、情報収集や早期対応に生かすとともに、スクリーニング会議の内容を充実させる。</p> <p>○保護者用の進路指導の手引きを修正し、該当学年の保護者に説明、配付する。</p>			
センター的機能の発揮	<p>○小学校や中学校の特別支援学級の在籍者数が増加する中、本校の特別支援教育の専門性を生かした小中学校のサポート体制が求められている。また教育相談はコーディネーターが中心で本校のエキスパート教員等の活用は十分ではない。</p>		<p>○校内人材の情報を収集し、一人一人の専門性を発揮してセンター的機能がより充実できるよう校内人材の活用を進める。</p>	<p>○研修会や教育相談でエキスパート教員の活用をすすめる。そのために校内の教員同士で情報交換したり補欠体制等相談しやすい体制を整えたりする。</p>				
5 業務改善の取組	<p>○職員一人一人の時間外勤務の削減</p> <p>○アンケート結果を生かした業務の見直しと調整</p>	全学部	<p>○昨年度、月45時間以上の時間外勤務を要した職員数(延べ人数)は年間30名であった。</p> <p>○年度始めや学期末など時間外勤務を長く要する繁忙な時期には偏りがあるが、繁忙期の業務量に個人差が見られ、改善が必要である。</p> <p>○担任業務、分掌業務、その他の役職の業務量や業務のあり方について見直しと改善が必要である。</p>	<p>○月45時間以上の時間外業務を要する職員数(延べ人数)を5割削減する。</p> <p>○文書作成業務の見直し、事務処理の簡素化、各職務の業務量の見直しが行われ、業務量の平準化が進んでいる。</p>	<p>○毎月の時間外業務の合計時間を各自が把握し、時間超過しないよう業務効率化の工夫を行う。</p> <p>○前年度のアンケート結果の分析を継続し、文書作成業務の見直し、事務処理の簡素化、各職務の業務量の調整を進める。</p>			

評価基準 A:十分達成 [100%] B:概ね達成 [80%程度] C:変化の兆し [60%程度] D:まだ不十分 [40%程度] E:目標・方策の見直し [30%以下]